

第一章 中国アナキズムの基盤

(1) 中国は農業社会

最初にアナキズムとは何かであるが、アナキズム学者とされるジョージ・ウドコックも、その多様性に手を焼いているという感じである。その著『アナキズム』の冒頭において、「『権威を否定しそれと闘うものは、だれでもアナキストである』とセバスチアン・フォールは言った。この定義はその簡潔さに魅力があるが、簡潔さは、アナキズムの歴史を書くにあたっても第一に警戒すべきものである。」「アナキズムの本質的な理論を説明することは、言ってみれば、プロテウスと取り組もうとするようなものである。」と述べている。アナキズムは大別してインディヴィデュアル（個人的）・アナキズムとソーシアル（社会的）・アナキズムに分け

られる。前者にあつては、徹頭徹尾個に実存したドイツの哲人、マックス・ステイルナーのような人があるかと思えば、他方では総破壊の哲学を称え、国家権力の打倒に生涯を傾けたロシアのミハエル・バクーニンのような人物もある。この流れからはクーデターの暴動、蜂起、テロリズムが生れ、十九世紀末の一時期にあつては、アナキズム即、狂信的ニヒリズムとしてのテロリズムの印象を、意識的にも、無意識的にも世間に与えていたのである。

アナキズムをさらに歴史的流れの中で眺めるならば、古典アナキズム・近代アナキズム・現代アナキズムの三つに分けられる。現代アナキズムにあつてはリバータリアンの名の下に、フランスのシモーヌ・ヴェーユ、アルベール・カミュ、ドイツ生れのユダヤ人マルチン・ブーバー、イギリスのハーバード・リードが含まれ、古典アナキストに至つては、東西の聖賢釈迦、キリスト、老荘（老子・莊子）までもがそうであるとされる。いつてみれば、アナキズムは現実の在るがままに多様であり、多様であることによつてアナキズムである。フランスの代表的なインディヴィデュアル・アナキストである賢明の哲人、アン・リネルは、^{オーストリア}「唯一のものではなく、夜空に輝く星のごとく無数に散らばっているものである」と、^{フランス}「相対的な複数主義の立場を説明しているが、アナキズムとは即ち個人的自由主義の謂でもある。多様さは、個人的自由主義において初めてその保証性を得る。」

語原的には、ギリシャ語の *anarchos* は「支配のない」を意味し、人は支配がないことで自由である。仮に支配という語の使用が許されれば、己れを支配するのは己れにおいてしかなく、他の如何なる支配も受けない。そこにアナキズムが社会的には、自治と自律を執る根拠がある。また、自治と自律の強圧者である権力の、集約的表現者としての国家が根底から否定される理由がある。

ピョートル・クロボトキン¹は、バクーニンがアナキズムの破壊的、否定的側面を主張したのに対して、無権力社会の建設的、創造的側面を主張したのであるが、彼によると「アナキズムは民衆のあいだに起原を持つものであり、そしてそれが活力と創造力とを保持するのは、民衆の運動としてとどまるかぎりであるにすぎない」（『近代科学とアナキズム』）としている。アナキズムはマルクス主義のように大学教授が教室の中で、哲学者が博物館の中で考えたようなものではない。民衆が自分自身、社会にあつて生存するために産み出した必要条件（相互扶助）を背景とするものであり、本来的に自然主義社会観の立場にある。それ故に否定されても、否定されても（アナキズムの名称がっこうとつくまいと）、地から泌み出す水のごとく湧出しつづけるのである。

アナキズム——それをもつと直截に理解しようとするならば、しばしばそうされるように、

やはりマルクス主義と比較検討してみるのがいいだろう。図式的に言えば、絶え間ない流動性、個人の自由なる連合、同胞的な連帯感、直接的な行動、小グループ主義、自然発生性の尊重、分業の否定と総合主義、教育の重視、地域主義と世界主義等々、すべて無強権と自由から導き出される一切の結論がアナキズムのものであり、およそその反対の極にあるのがマルクス主義である。即ち、画一的な平等性、鉄の規律をもつ党と団結、命令と服従、個人の介入を許さぬ組織、絶対和解しない階級的対立、プロレタリアの名の下の一党独裁、間接選挙と議会の肯定、暴力と粛清、家族主義と民族主義等々、強権と全体性が産み出す必然的な結果を、みなしよいこんでいるのである。それが現実の場面で、いかなる効力を発揮しているとしても――

以上のことを端的に言うなら、マルクス主義はその「経済学」的基礎としてのイギリスという土地と、十九世紀という時代性を背景とする、近代都市と労働者の思想ということになるのである。アナキズムは田園と、労働者以外の自立的な職人や農民の思想ということになるのである。極度な集中性、組織性は工場労働者のものである。職人や農民はそれを嫌うが故に、マルクス主義にあつては同盟軍の意味あいしか持たない。月々の賃銀すら満足に入らないルンペン・プロレタリアートに至つては、普通反動的なものとして敵視される。

いわばここに中国が、アナキズムと関りあう一切の理由があるのだ。中国は革命後の今日においても、八割は農民の国である。毛沢東『中国社会各階級の分析』（一九二六年三月）によれば、当時、鉄道・鉱山・海運・紡織・造船に働いている近代工業プロレタリアートは、約二百万人とされている。しかるに修正以前の原文には、「遊民無産階級」（ルン・プロ）だけでも、二千万人いるとされている。このような国にあつては、いや応なしにアナキスティックな思想が入り込まざるを得ないし、入り込むことでまた現実在即した革命が成し遂げられたのである。中国は農業国である。その自覚に根ざして行なわれた革命は、必然的にその核心にアナキズムを含んでいた。

中国が農業国であるという印象は、私自身訪中してみて切実に感じたことである。それはただし農村部において農業的であるというより、むしろ都市部において農業的なのである。中国の大都市である広東にしろ、長沙にしろ、武漢あるいは南京にしろ、それは農村と絶縁されたものではなく、延長上にある。そこには農村部と同じ悠長さがあり、無頓着、蕪雑さがある。近代的大工場の正門前に数匹の豚がうろちょろしているし、どうかするとその豚がメイン・ストリートで自動車を止めることだつてある。中国の都市にあつては、都市の人といえども、多少さっぱりした服を着た農民なのである。

つまり中国全体が、農村の雰囲気であまねに感じられているのだ。

このことはたとえ農民でなくとも（實際上農民が大半の国であるにしろ）、中国人自身が民族的キャラクターとして農民の性格を備えていることを示している。中国人の民族性となると、これまでしばしば論議されているところであるが、識者が指摘するところはすべて、つまりところ農民性に集約されるのではないかと思われる。因みに『支那の知性』の著者林語堂は、中国人の特性として十一點挙げている。節制・素朴、自然を愛すること、忍耐・無関心・老獪・多産・勤勉、家庭生活を愛すること、快活・好色——。中でも三つの特徴は、忍耐と無関心と老獪であるというが、そのいずれもが近代的都市人のものであるというよりは、前近代の農民のものである。

鳥山喜一は、個人の氣質の定型として、古くから多血質・憂うつ質・胆汁質・粘液質の四つに分類がなされているが、これを中国人の民性に当てはめると粘液質に当るのではないかと述べている（『支那・支那人』）。粘液質の傾向性をいえば、一般に情緒的反應が乏しく、人に対しては同情心が薄い。動作態度が緩慢でキビキビしたところがない。気楽な平和を愛し、小さな楽しみや、喜びを愛する。決断力に乏しく、活動性、積極性に欠ける。しかしいよいよ決心を固めたとなると、今度は容易にその決心を変えない。堅忍持久、その点執拗とも頑固ともい

え、無類に粘り強いのが、この種のタイプである。これまた大地に根ざす農民の本性、そのままだではないか。中国は農民によって中国なのである。

むしろ農民の本性において、アナキズムと対立する面もある。しかし思想的根幹としての自然性・総合性、成立条件としての自立性・共同性において、都市的であるよりはより農村的なものであり、アナキズムはやはり農村を基盤とする思想といわざるを得ない。

(2) 自立的な宗族共同体

中国人の悠々たる生活のリズム、農民のおおらかさといったものは、やはり中国へ行ってみねばわからないものである。解放軍の兵隊さんが、丸腰でどこへ行くのか、天秤棒の前後に荷物をつら下げてゆく。ほこりにまみれた自家の前口で、地べたにべたつと腰を下ろして、子供が井めしを喰べている。陽がカンカン当たっている大八車の上に、ゆうゆうと寝ているのがある。交通信号はあるのだが、赤になっても車がいなければ堂々と渡ってゆく。もし途中で車が来てもあわてず、むしろ車の方が人の通り過ぎてゆくのを見と待っている。驚いたのは、北京でデパートの入口に男が寝そべっていたが、二時間ぐらい後に、同じ場所を通りかか

ったら、まだ元の状態で寝ていたことである。大衆の自由の表現の場としての街頭風景が、日本とはまるで異なっているのだ。

そしてこれを、中国の前近代性に理由を求めることは易しい。確かに交通モラルを守るか守らないかなど、車の交通量の問題でもあるのであって、やがてそれは改めざるを得ない段階がやって来るものと思われる。しかしこうした中国人の、日本人の眼からみれば、どうしようもないような野放図振りというものは、それなりに社会的な理由があるのである。

よくいわれることであるが、古来中国にあっては、国家と社会とは分離され、民衆は国家の外に、併置状態に置かれて来たのである。諺に「老百姓納了糧、便是自在王」（百姓は糧食さえ納めてしまえば、あとは自由な王様である）というのがあるが、政府と民衆とは租税を納付するという一点においてのみつながって来たのである。（そのことは孫文も『三民主義』の中で指摘している。）国家は為政者として社会に何ら政治的保護を与えない代りに、社会の側も国家に何ほどの期待も持っていない。いわば「あんたはあんた、おれはおれ」と、各々、勝手に暮して来たのが中国社会の歴史である。

そのことをア・サー・H・スミス（一八四八—一九三二）は次のようにいつている。「熱帯農園に働く黒人が『人は銘々自分のことを、神様は私共一同のことを』という諺を聞いて、自分

で再び言い直す時にその思想のこまかな陰影を誤り、次のように言った。『人は銘々自分のことを、神様は自分のことを。』この新式の古諺のうちに、当局者に対する一般支那人の見解の神髄が含まれている。『支那の性格』日清戦争に従軍した国木田独歩の『愛弟通信』によると、金州半島の農民は戦争の始まったことを知らない。事情を聞かされて、「自国の存亡より、寧ろいち早く自己の米櫃を懸念したる也。』

しかも租税の一点においてつながっている国家といえども、小島祐馬『中国革命の思想』によると、歴代王朝の租税の定額は決して高すぎるものではなく、その高くない租税すら、農民は容易に支払おうとはしなかった。古来中国では定額の七割以上取立てることが出来れば上々で、五割以下になって初めて不成績とされ、不成績が二、三年もつづくと、地方官が更迭されるだけで、百姓は何のお咎もなかった——という。「かように人民は知らず識らずの中に、事実不完全なる無政府社会を構成しておったのである。」（前著）

国家の政治的保護の代りとして、民衆はそれを血縁的（男系的）な宗族および家族の中に、都市ではギルドの中に求めざるを得なかった。中国の宗族村落が国家権力から独立した、自らの自立共同体と呼ばれる理由がそこにあるのである。例えばやや特殊であるが、華僑がお互いの出身地以外の華僑とは決して一緒にしろとはせず、同じ仲間の華僑同士は、何かことがあ

るとびっくりするほどの連帯力を示すように、中国人が自己を守り、同じ血縁の助けあいの気持が大変強いのも、もとはといえば、そうした歴史的社会的な根拠があるのである。「民衆の生活は家族・宗族・隣保・朋友、または同業組合・同郷組合などに依拠するものであって、国家を背景とするものではない。会党などと呼ばれている大規模な秘密結社が、ほとんど公然と活動しているのもこの社会の特徴である。」(前著)

かくて現代にまで及ぶ、いわゆる中国人の性格としての悠々自適振りが造りあげられて来たのである。現在における彼らの生活リズムは、実に四千年来のものなのである。

他方では、中国社会の特徴として、「アジア的専制主義」あるいは「族長家父長的世界」が挙げられている。ドイツの哲学者ヘーゲルによると、中国はその原理として家父長関係を持ち、その関係が国家という有機的組織にまで発達し、家族制度が社会秩序の根幹をなしている。君主は家父長的支配者として社会の頂点に位し、彼を囲んで万民が依存している——というのである。したがって君主及び宗(家)族長の権力は絶大なものであり、絶対に反逆することは許されなかった。中国においては、三世紀から五世紀にかけて、教令に違反した子供は懲戒のため笞打たれ、たまたま子供を殺害するようなことがあっても、法律的には罪として咎められるようなことがなかったといわれる。つまりそれだけの実権を持っていたのが家父長であ

り、家父長群の長である君主であったわけだが、中国におけるそうした専制支配と、社会の無政府的開放状況とは決して矛盾するものではない。むしろ各宗族が絶対的であればこそ無政府たらざるを得ないのである。

家庭内においても、家産は共産的であり、互いに助けあって生きている。家父長といえども家産の処分は、家族の同意なしに勝手に処理することは許されていない。つまり中国は伝統的に、権力と自由の二面性において存立してきたのである。その根源の一面において、中国はアナキズムであった。

さらに中国のアナキズムへの志向性は、近因的な政治・社会条件の他に、遠因的な自然・客観条件も控えているのである。(A)土地の広大さ(B)人口・人種の豊富さがそれである。

中国の面積は九十五万七千平方キロ、およそ日本の二十六倍とされている。ソ連・カナダに次ぐ世界第三の土地である。この広大な中国であるが、当然のこと地域落差が大きいので、地形・気候・植物被覆等自然環境、人文現象からみて著しく異なっている。地理的には全体が三つに分けられ、(1)西南のチベット高原(2)西北の新疆蒙古高原(3)東部(太平洋側)の中国東部——とされている。

しかも中国の大半の人口が集中している中国東部は、地質構造線により東西南北に四区分さ

れ、各地域が異なっている。ことに華北と華南は著しい対照をなしており、作物一つとってみても、北が乾燥せる畑作地帯であるのに対し、南は湿潤な水田地帯である。言葉の違いも大変なもので、土地語では南北全く通じない。標準語（北京語を基礎とした普通語）の発達した今日といえども、農村部へ入っては話が通じませんと、北京の通訳は首を振っていた。

人口は現在一口に七億とも八億ともいうが（毛沢東自身わからないといっている）、問題はその総人口の大きさよりも、地域当りの人口密度の高さである。中国の人口分布を大まかにみると、全面積の四分の一の平原・盆地に人口の大部分が密集している。ことに揚子江デルタ地帯、黄河の沖積平原、四川盆地の三地域に全人口の三分の一が居住し、地域によって世界最高密度の五百前後のところもある。

人種は全体の九十四％が漢民族には違いないが、それでも主な種族だけでも漢族・チワン族・回族・ウイグル族・彝族・チベット族・ミャオ族・満族と八種族おり、その他蒙古族・ブイ族・朝鮮族等約五十種類、四千万人の少数民族がいるのである。しかも漢民族といえども、體質的にみて人群の変異度は非常に大きく、皮ふの色や背の高さをとってみても必ずしも黄色とは限らず、丈も一定でない。

こうした国にあつては、地域地域が一つ一つの国みたいなものであり、そこに独自の自治思

想が芽ばえる。中国では今日にあつてもしばしば地方の独立王国化の危険が説かれるのだが、当然のことである。儒教における礼は、その大家族制度内の通交上必要なものとして生れて来たといわれるが、人口・人種が多いことは確かに何がしかの儀礼を伴う社交術を発達させずにはおかない。そこに必然的に対者と自己という、相対的な感覚を磨きあげる地盤というものがあるのである。

(3) 農民叛乱と会党

中国においては政府と民衆とが離間し一見無関係に併列的であつたのは、根本的にはそうあるより仕方ないし、そうある方が国と民の双方にとって自存するに便利ということであつた。それは、一つには、しばしば異民族による専制支配が行なわれたことにもよる。つまり北辺の匈奴・モンゴル・契丹・満州族等は絶えず漢民族をおびやかし、漢・元・清の王朝を打ちたてた。異民族は武力による搾取を行なうが、民生に情が薄いのは当り前で、そのために、いっそう二者の間隙が広げられた。

そうした両者の離間は半面では確かに、日常的な気ままさというものを育てた。食べてさえ

ゆければ、貧乏など苦痛でなかったし、貧乏は貧乏なりに自足する楽しみの術を彼らは知っていたのである。中国人は世界でも無類の忍耐強い民族といわれる。それは農民ばかりでなく、読書人においても同じであり、頭に白髪をいただいてなお科擧の試験を受けつづけるというのが、中国流の学者であった。終日同じ仕事をして飽かず、生れたての赤ん坊でも、西洋の子供のように、ワアワアもがいたり動いたりしないといわれる。だからよほどの生活上の危機があっても耐えてゆけるので、土地を追い払われるような事態に至れば、収まるまで乞食をしてでも生き、やがて折をみて再び家郷に帰り、農夫となる。

しかしそれにも拘らず、中国が農民叛乱の国とされるのは理由があるので、過去をみれば歴然たるものである。歴代王朝交代の歴史は、とりもなおさず農民叛乱の歴史であった。ことに一つの王朝が末期に至ると、決まって叛乱が起り、忽ち疫病のごとく広まって、遂には王朝を滅してしまうというのが通例であった。小は数人による役人の殴打から、大は百万単位の革命に至るまで、規模と種類はそれぞれ異なっているが、無数の叛乱が、中国四千年の歴史を覆っているのである。そのうち主なものだけ拾うと、秦末にしてすでに陳勝・呉広の乱あり、つづいて百姓あがりの無類漢劉邦の起義に秦朝は倒れた。前漢、赤眉の乱、後漢、黄巾の乱。唐末、黄巢の乱。宋、均産一揆、宋末、紅巾の乱。元、弥勒の乱、白蓮教の乱。明末、李自成の

乱、清末、太平天国の乱。それぞれが十年二十年にわたってつづき、数省あるいは十数省にまたがり、皇帝を自殺に追い込み、王朝滅亡の契機をつくってきたのである。

叛乱の因は、専制的な搾取支配という政治的理由もあるが、洪水と旱魃という自然的理由が大きく働いていた。漢民族の中心的生活地である黄河・揚子江の下流では、毎年のように大小の氾濫があった。そこは豊穡ではあるが同時に中国西北部の微粒にして、水に弱い黄土質地帯であるため、じきに河川が溢れてしまうのである。また西北の地域では、しばしば旱魃による飢饉があった。洪水の場合、一夜にして数万あるいは数十万の人間が、家を失い流民と化すことは珍しくなかった。その上の専制支配である。

流民と化した農民は、先に述べたように、水が治まると再び帰郷して、それまでと同じく、黙々と耕作の仕事に従事するのが常であった。しかし帰るに家のない民はしばしば匪賊となつて盗みを働き、たまたまそれが王朝の末期で、軍事支配が弱まっていると、王朝自体への叛乱となつたのである。流民は莫大な数であったし、一般農民といえども潜在流民状態にあったので、いったん火がつくと、燎原の火のごとく広がっていった。

したがって匪賊といえども、その社会的な基盤は農民にあるのであり、直接農民を襲う土匪以外は、むしろ農民に味方し、農民の心情を代弁していたのである。少年毛沢東が、暗記する

ほどによく読んだといわれる『水滸伝』中の主要人物淋冲は、元は小役人でありながら「迫られて山に登った」とある。つまり流民化した農民を軸として、被压迫民としての読書人・職人・少数民族の寄り集まったのが匪賊であった。みな「迫られて山に登った」アウト・ロウたちであった。

そうした支配者への反抗の姿をとる賊を、ロンドン大学のE・J・ホブズボームは「社会的山賊」と名づけるのであるが、「社会的山賊」をさらに三分類して、高貴泥棒ロビンフッド的タイプ、原始的な抵抗を試みる闘士またはゲリラであるハイダック的タイプ、恐怖の的となるような報復者のタイプがあるという。このうちハイダック型というのは、いわゆる「自由な農民から出て来た軍人層」で、ロシアではコザック、ギリシャではクレプスのような辺境の特殊な「自由社会」から出現するものである。性格として集団表示にたくみであり、通常のそれよりはるかに野心的で、制度化された挑戦力を持つとされる。

この型は、中国の社会派匪賊にそっくり当てはまるようである。彼らはいいてい義賊意識を精神的支柱としており、内部規律は厳格で、官匪野盗と違って、婦女子を傷つけ犯さぬことをもって誇りとしていた。『三国志』『水滸伝』では祁山の麓に根拠地を構え、梁山の窟に居を置いているが、それは一種自由な解放区をなしていた。官軍は、賊に農民層の支持があるの

と、堅固な城塞によっているのとで容易に手が出ない。そこに叛乱の徒といえども必ずしも日本的な悲愴感がみられず、両書に現われる諸英雄・豪傑のような、快活さ、おおらかさが生れる理由がある。いわば相互扶助的な自立共同体の存在理由は、そのまま叛逆匪賊の集団的自生をも許したのである。

ところでそうしたアナキイで爆発的な力を持った社会派匪賊であるが、中国史の流れを通じて、白蓮会の系統が圧倒的に多い。白蓮会というのは、元代に発する弥勒菩薩を本尊とする宗教的政治的秘密結社であるが、これが異民族支配に叛旗をひるがえして大規模叛乱を繰り返した。「弥勒の乱」「白蓮教の乱」がそれであるが、前者は二十五年、後者は十二年間にわたる長期の叛乱であった。そのためモンゴル人の国家である元朝は、滅んでしまうのである。明末に至って、再び白蓮の徒が蜂起し、一時は二百万の勢力をもって官軍に対するのであるが、利あらず、やがて潰滅させられてしまった。しかしその後、大敗後にも、伝統は脈々と生きつづけるのである。

同じく異民族である清代にも、「覆清興明」（清を倒し明を興す）の旗印をかかげて活動した多くの秘密結社が現われるが、それらはほとんどかつての白蓮会を母体とした支派であった。白蓮会の宗教型であるのに対して、政治結社型といわれる天地会（三合会とも呼ばれる）、哥

老会（洪門会とも呼ばれる）といえども、元はといえば白蓮会の流れを汲むものである。嘉慶年間、山東半島および河南地方に続出した諸教諸会、光緒年間、排外的な思想から諸事件を惹起した大刀会・小刀会、北清事変の義和団、被圧迫少数民族客家の出である孫文が組織した興中会等いずれも同じ血を引いている。キリスト教の外衣をまとった太平天国乱にして、やはり中心勢力は天地会だったのである。したがって白蓮会の影響は遠く十三世紀宋末に発して、現代中国革命までに至っていることになる。

しかし一口に、社会派匪賊あるいは政治派匪賊といっても、貧民を襲わぬ義賊というだけのこと、賊には違いなく、その政治的スローガンは例外なく、反抗的改革的範囲に属するものでしかなかった。帝位を奪い取ることを篡奪（きんたつ）というが、終局的には王様を倒して自ら王様になりたいのが本心で、篡奪以前でも、その勢力が大きくなると、その首謀者はたいてい「王」を僭称していたのである。

(4) 文人官僚と腐敗

一般に西欧的意味あいでの都市とは、〈自由都市〉の名にみられるように、農村に反して、

拘束されることなく気ままに暮せる土地のイメージを持っている。しかし中国ではそれがむしろ逆であり、農村は気ままであっても、都市は不自由で拘束的なものであった。なぜなら都市には行政官庁が所在し、治安警察がいて喧しかったからである。西欧都市のように強力なギルドはあったが、それは文字通り全生活的な意味あいでの相互扶助団体であって、単なる職業的団体とは異なっていた。あたかも部落におけると同じごとく、同じ共同体内の救済・連帯の觀念はあっても、他のそれにはないから、一都市内でお互いに結束して、全体市民の権利と自由を主張するということはほとんどなかったのである。

逆にいえば、それだけ中国の政治の在り方が、専制的で、強大なものであったことを意味する。アジア的専制主義（アジヤ的専制主義）といわれる理由はそこにあり、王の力は都市は直接的に、農村は宗族長を介して間接的に、国の隅々にまで及んでいたのである。その力を代弁するのが官僚（マニピュレーション）である。中国官僚は世界に並ぶものがない国家的機能を果たしていたのである。よく知られているように、中国では秦の始皇帝が国内六国を併せて統一するや（BC・二二二）、全国の地方を三十六郡にわけていわゆる郡県制度をとった。ここに中国官僚制の発生の源があったのである。以来曲折はあるものの、実に二千年の伝統を持つのが中国官僚制である。

むしろ官僚制度は政治の執行上、必要なものとして生れた。彼らは曆をこしらえ、道路や運

河の建設にたずさわリ、己れ自身の存続の必要上旱魃や洪水の防止と救済策を講じたのである。堤防や貯水池をつくり、飢饉のための備蓄食糧も準備していた。しかしたとえ土木家・建築士といえども、たんなる公的職業官ではなく、権力的支配者でもあった。

なぜそうなるかという、中国では、封建制を廃して官僚制をとったというものの、事実上地方官は即ち封建領主を意味し、専横的な振舞いが可能であったからである。その主たる理由は農村に自立共同体が存在する理由と同じであるが、交通・運輸・通信機関の未発達はそれにいっそう輪をかけていた。馬匹で北京より浙江までゆくのに四日間、甘肅西辺までは九日間（実際にはその数倍かかる）かかったから、何か緊急の事態が起っても、地方官吏の自由裁量に任せるより仕方なかったのである。

中国官僚の主な仕事は税の取立てである。地方官衙は、中央に対する租税取立ての請負所のようなものであったと思えばいい。しかもたんに取立てといっても、中国のそれは、「一定額の租税を中央に送る義務はあるが、それ以上徴収することは地方官吏の腕次第というわけであって、その余分は地方官衙の収入になる。」（近代中国思想「藤原定」）。例えば、銀貨によって徴税する場合、地方官衙はそれを銕直して中央に送るのであるが、その際目減りするので、火耗と称して、正税の三割も五割も余計にとるのである。水増税の他に賄賂や勝手な名目による金

も捲ぎあげた。官吏としての正式の給料は、むろん中央政府からもらえた。

そういうわけで中国には「三年清知府十万雪花銀」という諺があつて、知府（日本の市長相当職）を三年勤めていれば、いかに清廉にやつていても、十万両くらいの金は出来るといわれたのである。そこで科挙の受験となると親族は挙げて応援し、受験する当人は当人で、例え白髪の人になろうとなお勉強しつづけるほど魅力があつた。官僚に登用されるということは、それほど割のいい仕事であつたのである。

ただし地方官が官吏たるの身分を利用して、せっせと金をあつめるのは、それだけ地方官というものが金を必要とする職であることを意味した。顧炎武によると、「赴任の人は動くこと数千里、必ず借債を作らなければ任に就くをえない。而もその土地風俗を知らず、言語は解せず、政權は多くこうかつな胥吏しゆの手に任せられる」といつている。官の新任に当っては、彼らは妻子兄弟の他、一族郎党を従えて数十日の旅をし、莫大な旅費を使う。そこへ持って来て財政・法律に明るい幕友と称する秘書を年俸に数倍する大金をもって雇わざるを得ず、赴任先の役所では、実務家の胥吏に一切仕事を任せざるを得なかった。

何しろ中国の官吏は儒学を中心とする役人登用試験に合格したというだけのことで、行政官としては何ほどの能力も持っていない。それがひいては政治への無関心さを誘い、金のかかる

仕組となり、徴税のみに熱意を傾ける結果となるのである。したがって中央政府は絶えず転動させた。それを官吏は昇進として喜びもしたのである。しかし転動に伴って再び金がいるし、当人はますます知らぬ他国の行政に心を使われないことになる。そこにつけ込んで土地の役人も収奪する。そのようなことで、民衆はますます政治から離れ、長い間には民族性とも化していったのである。

そうした中国官僚の腐敗墮落については、清末の、魯迅が「譴責小説」とする「官場現形記」(李宝嘉)や「老残遊記」(劉鶚)によく描かれている。その「老残遊記」の中で、著者が、いわゆる清廉官吏は収賄官吏よりもっと恨むべきであるとしているのは興味深い。剛弼という官吏が、魏氏父女の一家十三人を謀殺したという犯罪を誤認した。それで魏の下僕は賄賂を使って放免運動をするのであるが、剛弼はそのことをもって犯罪事実を実証するものであるとしたのである。これでは収賄官よりもっと悪いではないか、というわけである。「水滸伝」においても、武松や宋江は不当な罪で捕われるが、いずれも賄賂を使って助けられる。中国のような社会では賄賂をとる官吏の良さ、便利さもある点で複雑である。

ところでこうした中国社会の官僚制の延長についてであるが、清朝滅亡後といえども容易に消えない。むしろ各地に割拠した軍閥と結び(自ら軍閥を形成し)、財閥と結託する(自ら財

閥となる)中で、ますます官僚制を強化していったのである。その頂点にあったのが、いわゆる孔祥熙・宗子文・蔣介石・陳立夫兄弟の四大財閥(官僚資本家)であって、中国革命とは、とりもなおさずこれら官僚資本家を解体することに他ならなかった。

一九四九年、中華人民共和国が成立するや、早速「官吏の三害(汚職・浪費・官僚主義)・(資本家の)五毒(贈賄・脱税・盗材盗用・ゴマ化し・情報の盗渡)」が問題視されたことは当然のことである。その問題意識が發展して一九五一年十月から、有名な「三反五反運動」が展開された。三反とは、政府各機関(官僚)・学校・軍隊等における三害に反対すること、五反とは資本家の五毒に反対することをいうのである。かつての封建時代の胥吏と同じように、頭は変れど、実務家としての旧官吏は大量にそのまま残さざるを得なかった。革命後といえども、官僚の腐敗は引続いていたのである。

しかし革命当初、このように烈しい官僚主義反対運動を行なったにも拘らず、官僚主義はなおも頑強に生きつづけた。なぜならなるほど旧型官僚による単純犯罪としての収賄等の不正は消えても、近代化とマルクス主義に伴う新型官僚の吐く毒である、画一的・管理的・中央集権の三毒は避けられなかったからである。一九六六年、未だ柔らかな頭脳を持った非定形者としての少年群が、その官僚制に叛乱した。